二人のイエズス会神父とヘボン博士

工藤　進

「旅と文学」というテーマで、こういう題がふさわしいかどうか私にはわかりません。先週の金曜日の講演担当は巌谷先生でした。先生は東京のご出身で、ご自身とても旅の好きな方です。一方、秋田県の十和田湖の近くに生まれ、東京に初めて出てきたのが十八の時、それ以来片道六百五十キロ、往復で千三百キロを何十回となく繰り返してきた私は、「旅」のために乗り物に乗ることを快いものとして実感した覚えがありません。しかし、仕事上というか、専門の関係でフランスにしょっちゅう出かけることになり、現在、移動することはそれほど苦痛ではなくなっております。

飛行機でヨーロッパに行くには、直行便のなかった頃はカナダのアンカレッジに寄ったり、モスクワに降りたこともありましたが、現在は直行することが多くなっています。今の飛行機は座席の前の小さなスクリーンに地図を映し出すことができ、それで今、どの辺を飛んでいるかがわかります。成田から飛び立った飛行機は北に向かって進み、大陸に切れ込んでからはシベリアの北を通って、スカンジナビア半島の根元の方からヨーロッパに南下します。大分遠回りしているように見えますが、これは皆さんご存じのように、この地図はメルカトール図法という、赤道部分に比べ両極部分が実際より大きく描かれる図面を基にしているからです。地図で迂回しているように見える経路がほぼ成田・パリを結ぶ地上最短線ということになります（**写真1**）。

地球儀では、北極辺を中心に撮ったこの写真（球体を平面化した写真ですから、これも厳密には正確ではありませんが）をご覧になれば、日本とフランスを結ぶ最短経路はシルクロード

を通ってユーラシア大陸を横断するのではなく、北極回りであるということがお分かりになると思います。また飛行機の中のスクリーンには飛行距離も表示されます。日本からフランスへの距離は飛行の条件、状況によって違いますが、一万キロ弱。と言ってもピンとこないかも知れませんが、両極間と赤道間とでは少し違う地球の直径は、平均すると一万二千七百四十キロです。これに円周率三・一四を掛けると四万四キロという数字が出ます。飛行機は平均して一万メートル以上の上空を飛ぶので、飛行機で地球を一周した場合の距離はもっと長いことになる。

写真1

つまり日本からフランスへの距離は、球体でみると九十度以内の距離ということになります。両極が拡大するメルカトール図法では、日本と同じ北半球に位置するフランスも南半球のブラジルも同じ位の距離に見えますが、実際はフランスの方がはるかに近いのです。大野晋は日本語の起源を南インドに求めています（『日本語の起源』新版、岩波新書）。彼はそこの言語、タミル語は海路を通って日本に到達したと推定していますが、インドの南から日本へはインドネシア半島、スマトラ島（マラッカ海峡）と、赤道近辺を複雑に回って来なければなりません。おそらく八千キロ以上の道のりがあるでしょう。いまから三千年以上前にそのようなことが可能だったでしょうか。

一方、印欧語も日本語も、元々は南シベリア辺が原郷ではなかったかという説（東ユーラシア起源説。参照『日本語はどこから生まれたか』ベスト新書）もありますが、この説によれば、その東ユーラシアの原郷からそれぞれ東ヨーロッパ、日本列島への距離は四千キロ以下でしょう。ここで私が言いたいのは、地球は丸い球であって、円筒ではないということ。メルカトール図法でものを見ようとすると誤ることがある、ということです。あとで示すように、鎖国時代、日本に侵入しようとした西洋人がシベリア経由を考えたのは、極めて正しい地球の距離感覚でした。

この地図（**写真2**）はどこを表した地図だと思いますか？富山県の小学生が考えついた、大陸側を下に日本を上に配した日本地図です。この地図では圧倒的な存在のアジア大陸に日本列島が帽子のようにちょこんと乗っかっている。この地図だと中心は裏日本の富山県。東京は大陸から最も遠く、もっとも

写真 2

端っこ、アジアの辺境にあるように見えますね。「旅」というものを考える時、どこを中心と考えるか、どこからどこへ移動するかによって旅の意味がまったく違うように私には思えます。

さて明治学院の初期の卒業生に島崎藤村がいました。彼は十五、六の頃、少なくとも一年間、七十歳を超えたヘボン博士から直接教えを受けています。この二人がめぐり巡って再び邂逅した、と言ったら言い過ぎですが、この二人のあいだにはなにか遠い前世の因縁のようなものがあったのではという話を今日はするつもりです。

藤村がフランスへ行ったのは第一次大戦が始まる前年の一九一三年です。彼が当時、日本からは海路しかなかったフランスに渡ることになったいきさつは、きょうのテーマから離れるので省略します。ドイツとの戦争は翌年の夏に始まりますが、フランス軍はたちまちベルギー戦線で敗退し、パリが直接脅かされることになりました。当時、藤村が滞在していたパリの下宿屋のマダム・シモネは、彼に疎開することを勧め、自身の故郷である中仏の都市リモージュ市にある姉の家を紹介したのでした。藤村は数人の日本人画家（正宗白鳥の弟、正宗得三郎は最後まで藤村に同行）と一緒に八月末にリモージュに赴き、十一月中頃まで滞在します。藤村のフランスでの生活がどのようなものであったかは、河盛好蔵の『藤村のパリ』（九七年の読売文学賞。六二年の『フランス文壇史』に次ぐ二度目）に詳しく描かれています。

私の大学時代の師であったフランス文学者河盛好蔵（1902–2000）は、すぐれた日本文学愛好者でもあり、とくに藤村に強い興味を抱いていました。先生はパリ滞在時代の藤村の足跡をしらべるために、数回パリに長期の滞在をされました。八六年度の滞在の折には藤村の痕跡を求めてリモージュまでいらしたことがありました。ちょうど私は、明治学院大学から派遣され、リモージュから百キロほど離れたポワチエという町で研究員をしていましたが、先生の調査を手伝うことになりました。都合のよいことに、リモージュは私の親友ジャン＝ピエール・ルヴェ、リモージュ大学教授の故郷であり、また彼の父、ジャンはリモージュでは知らない人がいないという有名な郷土史家でした。

河盛先生にとって気がかりだったマダム・シモネの身元がこ

うしてたちまち割れました。名前はマリ Marie（Simonet 1857–1942）、生涯独身。彼女の甥の一人、河盛先生（当時八十三歳）より三歳上というエドワール・マトラン氏（一八九九年生まれ。したがって藤村と会ったのは十五歳の頃）はまだかくしゃくとしてご存命でした。マダム・シモネの姉の家だったという藤村滞在の家は所有者が代わっていますが、ヴィエンヌ河畔の丘の上に、彼がしばしば通ったという小さなカフェバーとともに現存します（**写真3、4**）。この家が、日本の文豪が滞在したという理由でフランスの歴史記念建造物になるかも知れない、という知らせがごく最近リモージュから届いております。藤村の母校である明治学院大学とリモージュ大学の間に、現在まで続く留学制度ができたのは、こうした河盛先生の調査のおかげです。

明治学院大学からの毎年七、八名の留学生は、カテドラル（サン・テチエンヌ教会）のすぐ近くの女子修道院を改装した美しい学生寮に住んでいますが、その建物の外塀角の壁龕に旅人や兵士の無事を祈るための古い小さな礼拝堂があります。「戦地にある人の無事を祈るのか、辻堂の前の蠟燭の並びとぼる火影には黒い着物のまゝ石段のところにひざまずく年若な女をも見かけた」（『エトランゼエ』）と藤村が描いた「辻堂」はこの堂です（**写真5**）。戦争が始まってすぐベルギー戦線に送られたリモージュ地方の若者のうち生還した人はわずかでした。親友ルヴェ氏の一八九五年生まれの祖母は、結婚してまもなくこ

写真 3

写真 4

写真 5

写真 6

の「死の戦線」に送られた夫が負傷して捕虜となっているとは知らず、毎日この礼拝堂に来て祈っていたそうです。藤村が「年若な女」と描写した人が二〇〇〇年、百四歳でなくなった自分の祖母であるとルヴェ氏は確信しています。彼女は戦争が始まったとき十八歳でした。

さてここから話は転調します。この藤村の滞在した家は、カテドラルなどがある町の中心から見て、ヴィエンヌ河（ロワール河の支流（**写真6**））の外側にあります。同じ岸の、「藤村の家」から遠くないところに、イエズス会の教師が多かったリモージュ管区神学校がありますが、その神学校の図書室から、なんと十七世紀の初めに書かれたという江戸時代の日本に関する書物が見つかりました。タイトルは『日本の殉教者のキリスト教的勝利』(*Les triomphes chrétiens des martyrs du Japon* 1624)。著者は、有名なマテオ・リッチ Matteo Ricci（1552–1610）の後任として当時北京に滞在していたイエズス会神父、ニコラ・トリゴー（Nicolas Trigault 1577–1628）。中国語の達人だった彼は初めての中仏辞書を作り、『中国へのキリスト教の遠征』*De Christiana Expeditione apud Sinas*（1615）といったラテン語の本も出しています。『キリスト教的勝利』の方も最初ラテン語で書かれたようですが、同じ会のピエール・モラン神父（Pierre Morin）によってただちに当時のフランス語に直されています。発見のきっかけは、リモージュ大学に寄贈された神学校の図書の目録を作ったときだそうです。ルヴェ氏が見つけました。この本はほかにパリ国立図書館に一冊あるだけだそうです。

本の前半は昨年リモージュの友人達によって現代フランス語に訳されています（日仏共同誌『東西』特別号二〇〇五年。ご希望の方は本学「言語文化研究所」へお問い合わせ下さい）。内容は戦国時代から江戸時代にかけての日本へのキリスト教の浸透、やがてはじまるキリシタン弾圧・殉教の様子が中心で、政治背景も正確さを欠きますが描かれております。かなり大部なもので（一ページ四五行。前半二五〇ページ）、著者が日本に滞在したことを想定させますが、実際は当時日中を往復していた、中国、ポルトガル、オランダ、イギリス人、といった商人からの聞き書きから成るものです。フランシスコ・ザビエル、あるいはポルトガル人のフロイスやロドリゲスのような来日体験のある著者によるものではないので、史的価値は高くはありません。地名ほか固有名詞の間違いには唖然とさせられること

があります。

しかしこの一種の奇書が我々に感動を与えるのは、アジアで最後に残った日本の布教（植民地化の手段として利用されることが多かったが）に対する強い情熱と、未知の世界へ向かう子供のような好奇心、それに貴族らしい（イエズス会の多くは貴族出身）無私の精神がそこに感じられるからです。貴族には、日本の武士同様、金銭に関わり、儲けを生み出す生業は禁じられていました。日本に来る宣教師の数が増えるにつれ、当時の日本の指導者は仏教側に傾いたというより、新教・旧教の対立、それぞれ信者である外国商人同士の対立、醜い相互誹謗が目立ってきたキリスト教に不審の念を抱きはじめ、次第に国を鎖国に導いて行きます。一方、日本のキリスト教徒については伝聞情報しかなかった『キリスト教的勝利』の著者は、日本の殉教者の態度に、ローマ時代に迫害、弾圧されて殉教した初期のキリスト者の純粋さと同じものを想像していたように思われます。自分の属していた貴族社会の古い価値観、十七世紀のヨーロッパではすでに失われてしまった、ローマ時代末期の人間と同じ価値観を殉教する日本人のなかに認めようとしているのです。

さて、このトリゴー神父の書から百年以上経ち、日本では鎖国の真最中の一七三六年、『日本誌』(Histoire et description générale du Japon) と題された大きな本がパリで出版されました。著者はパリの東北百キロにある町、サン・カンタンの貴族、フランソワ・グザヴィエ・ド・シャルルヴォワ (François-Xavier de Charlevoix) です。彼はトリゴー神父と同じくイエズス会の神父でした。不思議なことにこの本は、大判の二巻本と小型版の九冊本で同時に出版されています。売れ行きに自信があったのでしょう。著者のシャルルヴォワ神父はトリゴー神父同様、来日経験はありません。

ここでこの二人の神父が属していたイエズス会というカトリック修道会について一言述べておこうと思います。

イタリアのベネディクトウスが六世紀、ナポリとローマの間にあるモンテ・カッシーノ山の中腹に開いたベネディクト修道院が、ローマ法王公認の最初の修道会ということになっていますが、これ以前にこういう修道集団がなかったわけではありません。ローマ帝国末期にはすでに、中近東など、帝国東部では、共同生活にしろ隠遁生活にしろ、修行するキリスト教徒が現れています。四世紀のフランスの聖マルタンはトゥールの司教に任命される前に、ポワチエ近郊のリグジェで一種の修道院を組織しています。先週巌谷先生が言及されたアイルランドの聖者、聖パトリック（パトリス）は五世紀の人です。彼は海賊に育てられたと言い伝えられている人で、フランス（当時はガリア）で宗教教育をうけ、その後アイルランドに渡っています。六世紀から七世紀にかけ、主に大陸で活躍したアイルランド（イギ

リスよりキリスト教化が早い）の聖コロンバヌスは、当時聖書がなかったガリアにラテン語聖書をもたらしたとされています。ガリア人は自分たちの変わり果てたラテン語（フランス語の前段階）を、相変わらずラテン語そのものだと勘違いしていたのに比べ、もともとラテン語とはかなり違う言語（ケルト語系）を母語としていたアイルランド人は、フランス語のような夾雑物的言語がなかったおかげで、新鮮な感覚で正しいラテン語に接していたのでした。

さて法王公認修道会であるベネディクト会は、例えばクリュニーの修道院にみるような栄華に到りましたが、富むにつれて腐敗も大きくなります。これに対し中世も後半、富を一切拒否するという修道団（フランシスコ会やドミニコ会。乞食僧団とも言われる）が現れます。といってもベネディクト会が消えた訳ではなく、その他さまざまな修道団が林立して中世末期の混乱した時代に向かいますが、初期の修道団の、読書（瞑想）、祈りより肉体を用いた作業を重視するという性格は本質的には変わっていなかったかも知れません。これは書物というものがほとんどなかったのですから当然です。十六世紀になると、印刷術から生まれた書物（聖書）を梃子にして、古い修道団のやり方を覆し、神と信者との間に仲介人（僧侶）は必要なし、と主張するプロテスタントが生まれて激しい新旧闘争が始まります。一五三四年、パリのモンマルトルの丘の諸殉教者聖堂（現在のサクレクール寺院の場所にあったベネディクト女子修道院の一部）で結成されたイエズス会は、こうした知的プロテスタントの攻撃に、実力で反撃する目的で生まれたものです。「実力」といっても、彼らには当時の新教徒の指導者に劣らないほどの古典的教養がありました。急速に拡大したこのイエズス会の主要な業務は、古典語（ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語）教育と、学校経営、それに外国への布教活動であり、このため非ヨーロッパ言語も習得しました。

来日したフランシスコ・ザビエル（1506–52、今年は生誕五百年）は、もともとスペインとフランスのあいだのバスク地方の貴族であり、イグナチウス・デ・ロヨラ（スペイン・バスク）が創設したイエズス会の七人の創立メンバーの一人です。パリ・モンマルトル（モンマルトルは「殉教の丘」という意味）のベネディクト教会で共同誓願がなされたことからわかるように、この新しいイエズス会は古いベネディクト修道会の流れを汲み、中世の騎士道的価値観をもった修道団でした。

シャルルヴォワは一六八二年生まれですから、一六八五年生まれのバッハやヘンデルとほぼ同年代。彼の名前はフランソワ・グザヴィエ（スペイン風に言えばフランシスコ・ザビエル）。彼の父の名はフランソワですから父の名にグザヴィエ（Xavier）を付けただけ、とも考えられますが、シャルルヴォワ家の近い先祖にグザヴィエという名は見当たりません。イエズス会の共同創立者であり、初めて宣教師として来日した人物と

同じ名前なのは偶然なのでしょうか？

日本に来たフランシスコ・ザビエルは一五五二年に西インドのゴアで没していますが、比較的早く（一六二二年）聖人（Saint）の列に加わっています。カトリックでは、神はもちろん大事ですが、神と信徒との間には聖職者がいます。また聖職者に限らず信者として抜群の力を示した人間は聖人になります。ジャンヌダルクは二十世紀になってから「聖女 Sainte」と認定されました（日本語では「列聖」と言います）。彼女はザビエルより百年も前の人ですが、列聖されたのはザビエルの四百年後です。カトリックには男尊女卑の思想が古くからありました。聖者になる条件は、その人間のすぐれた業績や倫理的価値、といったもので決まるわけではありません。こうした人間的価値は、時代や場所によって変わるからです。聖人の条件は、その人が「奇跡 miracle」を行ったことが証明されることです。「奇跡」は常人がなし得るものではありません。一方、「奇跡」を行った人間は「常人」ではなく「聖人」ということなのです。カトリックでは聖人は神と同列に扱われ、信仰の対象となります。キリスト教の伝統の強い国で、生まれた子供に聖者の名前をつけることがあるのはこういう事情を背景にしています。

さてフランソワ・グザヴィエ・ド・シャルルヴォワはその名前のせいかどうか、早くから日本に興味をもっていたようです。サン・カンタンで初等教育をうけたのち、パリに移り、自分の生年（一六八二）に創設された「ルイ大王校」で研鑽をつみます。布教地の希望は当然極東でしたが、命ぜられた赴任先は、当時フランスの支配下にあったカナダのケベックでした。そこでラテン語文法を四年の間（1705–09）教えた後、司祭の資格取得のためフランスに戻り、しばらく母校の「ルイ大王校」で古典語と中世の神学の伝統を引く哲学（「哲学」は長く「教養」の基礎をなした）を教えます。ルイ大王校はもともとイエズス会が設立した学校で、パリではアンリ四世校とならぶ名門校です。現在「ルイ大王」の方はどちらかと言えば理科系。ここの「予備級（プレパ）」を修了して「ポリテクニーク（理工科学校）」などに進学するものが多く、「アンリ四世」の方は「ノルマル（高等師範学校）」志望が多いとされています。

彼は次の任地が決まる一七一九年まで極東の日本を思い続けていたようです。一七一五年には、イエズス会の先輩（クラッセ神父）の書いた『日本教会史』（1689）を基に、さまざまな情報を加えてふくらませた三巻本の『日本帝国キリスト教盛衰史』を北の町ルアンで出します。こうして日本に行く機会を待っていたようですが、任命されたのは再びカナダ。そのころ鎖国をしていた日本は宣教師が入れる状況になく、このイエズス会本部の決定は順当なものです。さてこんどは教師としてではなく、アメリカを中心に「新世界」の探検が主な仕事でした。当時は「新世界」という語は、アメリカ大陸だけを指すのではなく、アジアのあまりよく知られていない国も指すのが常識でした。したがってヨーロッパと古くからつながりのある中国は

「新世界」ではなく、日本は「新世界」なのでした。彼はカナダから北極をかすめて日本に渡れないかと考えたようですが、この経路の検討はイエズス会本部から与えられた任務に関係していたわけです。

日本行きの思いを募らせながらも果たせないまま、シャルルヴォワは一七二三年に帰国します。

シャルルヴォワは、一七〇一年にイエズス会が発刊した機関誌『トレヴー誌』(*Les Mémoires de Trévoux*。Trévoux はスイスに近いフランスの町。ここで印刷された)に日本に関する記事をいくつか載せていますが、一七三六年の『日本誌』の直接の下敷きとなったと思われる本がいくつかあります。『日本誌』の殉教場面は、同じイエズス会トリゴー神父の叙述の系統ですが、トリゴー神父についての言及はありません。一つはまずいま述べたクラッセ神父の『日本教会史』、それを基にした自著『日本帝国キリスト教盛衰史』、またイタリアのイエズス会士、ダニエロ・バルトーリ Daniello Bartoli の『イエズス会史・日本編(「アジア」の二部目)』*Dell'Historia della Compagnia di Gèsu, il Giapone, seconda parte dell'Asia* などですが、決定的なものは一七二七年に出たドイツ人医師ケンペルの『日本誌』*Geschichte und Beschreibung von Japan*(一七二七年英訳、一七二九年仏訳)のようです。シャルルヴォワのタイトル *Histoire et description générale du Japon* は、ほぼこのドイツ語のタイトルの直訳です。

エンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kaempfer (1651–1716)は一九九〇年、長崎出島のオランダ商館の医師として来日して二年間滞在していますが、九一年と九二年の二回、商館長の江戸参府に随行して日本を観察、その記録が死後出版されたのでした。当時の日本を実際見た西洋人の記録として実に貴重なものです。来日が果たせずに間接的な日本研究を発表し、この分野の権威と自任していたに違いないシャルルヴォワにとってこの本の衝撃は大きいものがあったと思われます。数年後、パリで出版された彼の『日本誌』には、ケンペルの本に対する共感(これは自著に取り込む)もありますが、禁教下の日本を描く現実的なプロテスタント医師の筆致に対し、理想論的観点からの反撥も見られます。しかし、しょせん来日経験のないシャルルヴォワの記述は哀しいほど現実味がありません。日本の風俗に関する正確な知識の欠如、歴史にかんするアナクロニスム、あげていったらきりがありません。しかし大きく見ると、日本人の起源=タタール人説など、日本人起源論をめぐる論争を超越して正鵠を射たようなところもあります。日本が列島なのか、大陸に結ばれた半島なのかということさえまだはっきりしていない時代に、日本人の起源は、これまで言われて来た「中国人」ではなく、中央アジア起源のタタール人(蒙古人、言語的にはウラル・アルタイ系)であると彼は断言しているのです。これは日本人の起源を東ユーラシアに置く、現代の分子人類学研究の結果に近いものです。

十七世紀初頭の、新旧宗教抗争の日本での結果は、布教を放棄するかわりに交易権を得たプロテスタント側（オランダ）の勝利に終わっていました。ザヴィエルから始まって、ポルトガルのフロイス（1532–97）や、ロドリゲス（1561–1634）など、最初に日本を開拓したイエズス会側は撤退を余儀なくされていました。イエズス会だけではなく、東北仙台藩のフランシスコ会など、カトリック側の足場はほとんど消えつつありました。十七世紀冒頭、メキシコ回りでヨーロッパへ行き、ローマ法王に謁見した支倉常長（1571–1622）はフランシスコ会でしたが、キリスト教禁制下の日本に帰国（一六二〇年）した常長（洗礼名フェリペ・フランシスコ）は不遇のうちに没しています。

シャルルヴォワの本には、哲学より実利を重んじるプロテスタント的価値観への敵愾心も感じられます。彼の『日本誌』の冒頭の数ページには、十五世紀頃から始まる日本への接近の試みの例（ほとんど失敗例）が列挙されています。この試みは、カナダからにしろ、北欧、ロシア回りにしろ、北極をかすめて日本に達する最短距離であり、西インド、東南アジア経由で来日したケンペルに対抗しようというものだったかも知れません。冒頭で言いましたように、現在は、シャルルヴォワの想像した北回りは、現在飛行機でもっとも用いられる経路となっています。

明治学院大学図書館は昨年、シャルルヴォワの『日本誌』二冊の初版本を手に入れました。二冊本には同じ年に出た小型九冊本にはないメリットがあります。多くの図版があり、とくに折り込みの日本地図があります。しかし日本の風俗を描いた図版の多くは、ひいき目にみても日本の当時の現実を写したものとは思えません。キリシタン磔刑の図などは十六世紀後半、宗教戦争の激しかったころのヨーロッパの風景です。綴じ込み日本地図（**図7**）の奇怪さは、これがヨーロッパ人の考えるつい三百年前の日本の姿か、とため息がでるくらいです。小島が十ほど集まっただけの北海道、ジャガイモのヴァリエーションとしか見えない本州、四国、九州。鎌倉が江戸と千葉の間にあります。別の図版には織田信長の安土桃山城（アンズキ山、と読める）が描かれていますが、まるで手足を広げたムササビです（**図8**）。一転して目を日本の外に向けるとなんと、「日本海」は Mer de Corée（朝鮮海）と名付けられ、日本の南岸に接した太平洋が Mer du Japon（日本海）。これが当時の西洋の常識だったのでしょうね。「朝鮮海」を「日本海」に変えたのは一体誰なのでしょうか？

日本人の内面、性格、教育、法体系など、目に見えないものについての記述からは、シャルヴォワがどうしても到達できなかった日本になにを見ようとし、なにを期待していたのかわかります。中国の風物、および中国人の性格は当時よく知られていました。しかし日本とそこに住む日本人はどうも中国（人）とはずいぶん違うらしい。一体キリスト教なしに繁栄しているこ

の幸福そうな人達は何者か。シャルルヴォワは、太陽王ルイが没してからようやくかげりの見えてきた十八世紀のフランス、また調査旅行がなかなか思うようにいかないカナダで、自分の貴族階級の価値観と理想とに似た美徳が、日本という極東の不思議な島国（あるいは半島か？）に存在するらしいと早くから考えていたようなのです。

ここでシャルルヴォアの『日本誌』に、日本人の性格を中国人と比較して述べている箇所を引用してみます。彼は『日本帝国キリスト教盛衰史』一七四〇年版（二巻本）の中に、この『日本誌』の日本人論をほんの少し変えただけでそのまま収録していますが、翻訳したのはこの『日本キリスト教史』の中の一節（1巻十―十三頁）です。

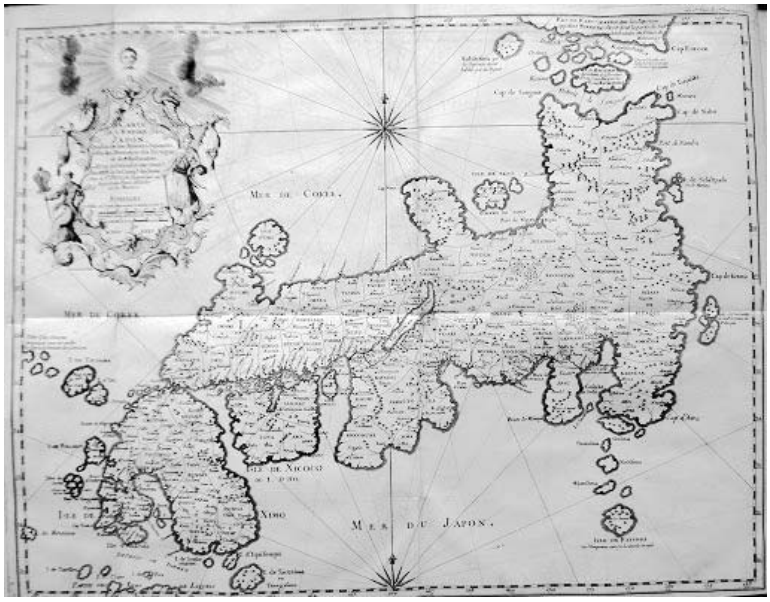

図7

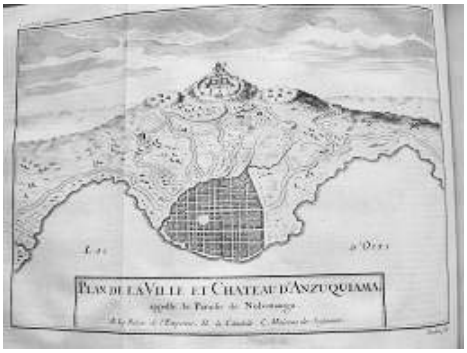

図8

中国人のあらゆる行為はすべて計算され、彼らの行動を律しているものは賢さ

である。一方、日本人を動かす原理は万事、誇りである。前者は、ほとんど常に「利」に帰する用心深い行動基準に忠実に従うことを誇りとする。後者の智恵はおのれに課したある道徳律から逸脱しないことにあるが、この道徳は間違ったり、過激なことがある。双方のあらゆる欠点や美点はここから生じる。中国人は控えめであり、おだやかで用心深く、何事においても細心で面倒なほどの厳密さをもっている。師や両親、主人に敬意を表する場合はとくにそうである。しかし偽ることに長け、すべて打算で動く世の人々の間では、このうわべの敬意が本当の愛情から生じているかどうかは不明である。中国人は世界で最も利にさとい国民である。取引の不正、商売上のごまかし、かっぱらい、虚言、すべて中国ではすこしも不名誉なことではない。ごまかしの現場を押さえられた商人は「おれよりおまえの方が上手(うわて)だ」と言えばすむと思っている。

日本人は正直で誠実、よき友、極めて忠実であり、親切、気前がよく、思いやりがあり、財産を軽蔑し、商業を賤業と見なしている。したがって日本人ほど貧しい民はない。しかしこの貧しさは、自立心から生じるものであり、「美徳」(の神)によって尊敬すべきものとされ、初期のローマ人を他の民族の上位に置くこととなった「貧困」である。日本人に見出されるものは必要不可欠なものだけだ。すべて清潔で好ましく、彼らの顔は満ち足りた表情をしている。この強大な国家のすべての富は天皇及び高位の者の手中にあり、彼らはこれを誇りに思っている。この壮大な富は他に類を見ない。皇居や帝国の首都についてオランダ人達(とくにケンペル。ケンペルはドイツ人だがオランダの会社に雇われていた。訳者注)が書いた以上の富は、他の、より強大な、どの君主制国家の歴史にも見出されない。

驚嘆すべき事だが、国民はこれらを目の前にして羨望の念を抱かない。もしある有力者が、なにか不幸なできごと、あるいは主の寵を失って貧苦の状態に落ちても、彼は、最も傑出していた時より尊敬されないわけではなく、また誇りを失うわけでもない。この国民は真理(宗教的・訳者注)を愛する。真理を知ると、以前は無知であったことを恐れずに告白する。この国民はほんのわずかな欺瞞も容認できず、悪口、虚言、ごく些細な盗みでさえ死罪である。

この国民は、他の人々(西洋人・訳者注)が容易に身を委ねる怒りの発作を理解できない。不運な時、日本人が神を冒涜したというような例はない。不平を口にする事さえ稀だ。ケンカ早い人、よく喋る人間は彼らの間では極度に軽蔑される。彼らがどんな厄介事が起きても毅然とし、平常心を保てることは驚くべきことである。賭け事を好まず、これは不正な取り引き、名誉ある人には相応しくない行為とみなされる。(……)日本人は誇り高く、活動的で復讐心が旺盛である。己を高く維持し、外国人に対する軽蔑的

態度は過ぎたものがあるが、それを抑えようとすることは必ずしもよいことではない。静かで冷静に見える時こそ彼らは恐ろしい。（工藤訳）

「ごく些細な盗みでさえ死罪」という文言はちょっと気になります。モンテスキュー（1689–1755）の「法の精神」*De l'esprit des lois*（1748）のなかに、江戸時代の日本の法体系が述べられているところがあります。「ごく些細なことでも重罪が課せられる」日本の法はバランスが失われている、というものですが、彼はシャルルヴォワのこうした記述を読んだのかもしれませんね。時代的には矛盾しません。

二年前、明治学院大学の図書館で、雑書のコーナーにほこりをかぶって放っておかれていたもの中から、ヘボン博士の署名が入った小型のフランス語本が三冊発見されました。いままで述べて来たシャルルヴォワ神父の『日本誌』九冊本のうちの四巻目、七巻目、八巻目でした。彼はこれを日本で誰かに貸した形跡もありました。確かなことは、ヘボンはフランス語にかなり堪能であったことと、おそらく『日本誌』九冊全巻を一八五九年来日したときに携帯していたことです。彼は来日するとき、ニューヨークを四月に出航、ほぼ半年かけ、ヨーロッパ、喜望峰、香港を経て十月に神奈川沖に達しています。この本を乗船するときから持っていたのか、あるいはフランスに寄港したときに購入したのか、あるいはまた上海や香港で購入したものかわかりません。一八五九年と言えば、『日本誌』が最初に出版されてから百年以上経っていますから、アメリカで購入し、はじめから持って来たと考えるのが一番妥当ではないかと思います。アメリカの名門大学はたいていそうですが、ヘボンが卒業したプリンストン大学では古典語を含めたいわゆるリベラルアーツ教育が厳重に行われていたはずです。本学の中島耕二講師によると当時のプリンストン大学では「ギリシャ、ラテンおよびヘブライ語の古典学習が重要視されていた」（『明治学院大学の教育の理念と創設者ヘボンの生涯』）ようですし、また、初めこの古典語学習に積極的ではなかったヘボンは、あることを契機に「古典の基礎学問を真剣に学ぶようになった」（同右）といいます。

古典語の勉強には当時はなおさら、独仏語は必要だったでしょう。しかしシャルルヴォワから百年以上経ち、伊能忠敬（1745–1818）の日本地図も完成し、伊能の没年生まれの松浦武四郎（1818–88）が北海道は小芋の集まったような形の国ではないことを示して、日本についての知見は矯正され刷新されていたはずなのに、なぜヘボンはこの古いシャルルヴォアに固執したのでしょうか？　シャルルヴォワの同時代でも、ケンペルの本の方がはるかに役立つと思われるのです。一八五九年と言ったら、ほんの百五十年前でしょう、三百年前はまだしも、百五十年前の西洋人にとって、日本は相変わらず海靄の彼方に浮か

んでいたとは考えられません。この謎は、こんどはヘボン研究の方に解いていただきたいと思います。中国に滞在し、中国(人)を知っていたヘボンはもしかして、日本人についてシャルヴォワと同じような思いを抱いてやって来たのではないか？

そしてヘボンはそのような日本人に会ったのでしょう。そうでなかったらあれほど日本(人)に惚れ込み、打ち込めるはずがない。それにしてもシャルルヴォワやヘボンがイメージした日本人、誇り高く、誠実、親切、思いやりがあり、財産を軽蔑するという日本人、いまどこに隠れてしまったのでしょうね？

ご静聴ありがとうございました。

二〇〇六年十月十七日